

由布院行

中谷宇吉郎

青空文庫

去年の夏のことである。漸くようや学校は卒業したが、理研りけんの方の建物が出来上つていなかったので、暫くしばら物理教室の狭い実験室の隅ちぐうを借りて、仕事を続けていた時のことである。Y君やM君と一緒に、一室で三組も実験をしていて、窮屈な思いをしていたところへ、夏が来た。

夏休みで学生がいなくなると実験の方はだれて来る。誰か一番先に来た男が、紅茶をわかつてピーカーに入れて、手製の硝子細ガラス工の管に水道の水を通して冷ひやして置く。そして顔が揃そろうと、それを飲みながらとりとめもない話をする。まるで一日何もしないよ
うな日もある。毎日能率のあがらないのを知りながら、家にいた

って仕様がなかったので出て来る。

何だか頭が疲れて来たので、思い切って遠くへ出たいような気がして来て、それに前から卒業したら一度顔を見せて来なければならぬと思っていた矢先だったもので、九州の伯父おじのところへ行くことにした。伯父といつても、故郷にいた時には同じ家に行き、それに父が早く亡くなったので、自分の子供のように可愛がってくれていた伯父なので、思い出したら一日も早く会いたくなつてしまつた。

伯父のいるのは由布院ゆふいんという所で、九州の別府温泉べつぷと同じ系統に属する辺鄙へんぴの温泉地である。温泉地といつても、別府から六里り

の峠を越した盆地の中で、九州でも「五箇ごかの荘しょうか、由布院か」といつてからかわれる位の山の中なのである。

比較的す空いた下ノしも関行せきゆきの急行の窓によりかかつて、独り旅の気たのし軽さを楽みながら、今頃は伯父が手紙を見てどんなに喜んでゐるかなどと、ぼんやり考えて見た。高等学校の頃行つた時には汽車の中の氣づまりさに耐えかねて、瀬戸内海は汽船にしてしまつたのであつたが、今度はどうしたことか、大変伸び伸びした氣持になつて、誰とも口もきかず、眠つたような覺めたような氣持でいたので、ちつとも疲れなかつた。

窓を明あけつ放はなして涼しい風を納いれながら、先生から戴いたいて来たそ漱うせき石研究を膝ひざの上にひろげて、読むでもなく読まぬでもない氣持

で、時々眼をあげると、瀬戸内海だったりしたこともあった。

夜遅く下関へ着いて、駅前の名もない宿へ泊る。すぐ前は、何とかホテルという大きい洋館だった。暗い電燈の下で、教室の連中へ葉書を書く。

……汽車の中はすいていてよかった。二十四時間仮眠して来たので、ちつとも草臥れなかった。東京からずっと一緒に来た新婚の夫婦らしいのが、初めは大分行儀がよかったが、だんだん草臥れて来て、口をあげて居眠りを始めたのが印象に残る位で、別に変ったこともなかった。今夜の宿は路に向って古い手すりのある旅籠だ。御茶菓子に EISEIGIYO という判を押した最中が出た。明日は朝早く海峡を渡る……

帰って見たら、実験室の黒板にこの葉書が貼りつけてあった。そして所々赤インキで○がつけてあった。

由布院へは中学の時に一度行ったことがある。その頃は伯父も別府にいて、夏休みに弟と一緒に遊びに行った時、由布山へ登るというので、伯父が二人をつれて行ったのである。その時は六里の峠に馬の通る道があっただけで、折角のいい温泉がありながら、宿屋などといっても、極めてお粗末なのが二軒ばかりあっただけだった。勿論もちろんこの附近は、五里四方位どこを掘っても温泉が出るのだから、別に大したことではないのである。それが、今度は大分沢山宿屋も出来て、別府から食料品を運ぶ都合で乗のり合あい自
動車が通うようになっていた。

この道位、自動車で馳はしつて気持のよい所は少いだらう。何しろ三千尺じやくの峠を越して、由布院の盆地が二千二百尺の高さなのである。六里の高原を、一時間半自動車が走りつづける。山が急なために、道は色々に折れて、溪たにに沿いながら登って行く。アメリカの活動によく、広々した高原を見渡しながら、自動車が山腹を縫って走るところがあるが、丁度あのような所なのである。大きな岩の蔭かげで急に道が折れる時など、自動車が丁度天へ馳かけ昇るような気がする。岩を越して、その裏に脈々として続く道を見るまでは、随分冷や冷やすることもある。時々ふり返ると、別府湾がだんだん低く小さくなって行く。登りつめた頃から、周囲は茅かやの草原になる。鶴つる見山、由布山のなだらかな麓ふもとに、針葉樹の黒い密

林が望まれる。そして緑の高原が遠く続いて、ゆるやかな起伏に沿って、所々に黒土の道があらわれている。自動車は安心したように全速力を出す。ここまで来ると、急に空気の冷やかさに気が付く。

こんな景色が一時間近く続く。赤倉あかくらの野は三里というが、草原を走る自動車の道は一里に足りない。由布院の盆地の斜面にかかると、自動車はエンジンを止めて、緩やかに降り始める。由布院が見える頃になると、この斜面一帯に牛が放牧されている。自動車の行手にも平然としていて、怪訝けげんそうにこちらを見ていることもある。そしてずっと近くになってやっと愕おどろいて逃げ出す。時には、道の反対側で草を喰くっていた仔牛こやしまで、親の逃げる方へ飛

び出して轆ひかれそうになる。運転手は慌あわててブレーキをかけながら、「馬鹿！」と大声でどなりつける。その仔牛の周章あわて方には思わず吹き出させられる。

「こんなところにいる牛は随分仕合せですね」というと、相乗あいのりの爺じいさんが、「いいや、そうでもごわんせん。彼奴あいつらもやつぱり淋さびしくなると見えまして、時々家へ戻って行きますが、叱しかりつけられてまた山へ行きますわい」という。何でも、農繁期の時だけ連れ帰って仕事をさせて、後は邪魔になるのでまた山へやって置くのだそうである。牛共も毎日一回運転手に叱しかられて、時々はおかみさんにも叱しかられて、やはりあのよういきよとんとした顔をしているのだらうと思うと、ちよつと可笑おかしくなる。

伯父の家は、金鱗湖きんりんこという小池のふちの茅葺かやぶきの家である。別府で一流のKというホテルの主人の別荘地を拓ひらいているのである。伯父も変り者であるが、Kの主人はまた一層変っている。こんな山の中に六千坪の地面を買いこんで、金鱗湖などという池まで取り入れて、それを全部伯父に預けて、その趣味のままの庭園を拓かせようというのであるから、その計企けいきからして世離れがしている。伯父が遠い国からやって来て、別府に移り住んで間まもない頃、雑草のようなものを鉢に植え込んで軒先に出して置いたのを、Kの主人が通りがかりに見て、感心してはいり込んで来たので知り合いになったのださうである。

六千坪の草原は半ば以上拓かれて、趣おもむきのある日本式の庭園にな

っていた。そしてその中に小さく建っている茅葺の家まで、庭園の一つの景物けいぶつとなつているのにも、伯父らしい用意しゆが偲しのばれた。自動車の音を聞いて、伯父は素肌すはだに帷子かたびらの袖無そでなしを一枚着たまままでとび出して来た。三年ぶりなので、さすが白髪は目立っていたが、思ったよりも元氣であつた。

ひと一わたり東京の話ひとをきいて、伯父は如何いかにも満足まんじつらしく喜んでくれた。実は卒業した年の四月ちよつと忙いそしかったもので、暫しばらく手紙を出さなかつたところが、落第らくだいしたために通知が出来なかつたものと合点がてんして、「誰でも間違まちがいはあるものだから、もし落第らくだいなんかしたのでも気を落さないで」などと、慰めの手紙よこを寄して

くれたことがあったのであるが、こんな所で、山と雲だけを眺めている伯父の身にとっては、もつともな心づかいであつたのである。

東京の忙しい生活に追われていた自分は、久しぶりで昔の生活に返つたような気がした。小川をとり入れた小さい池も、伯父が自分で彫ほつたらしい梅ばいりあん里庵あんという篆てんじ字の額も、すべての風物が珍めづしかった。帆足ほあしばんり万里の軸じくの前に坐すわつて、伯父は今の生活の心安さを色々と話してくれた。茄子なすを作つたり、野菊やトマトを植えたり、鯉こいを飼つたり、鶏とりを養つたりして、まるで自給自足の生活であるが、別に不自由は感じないから安心してくれといった。

「人はみんな、わしのことを由布守ゆふのかみといつてくれるので、もう

人間はどうして暮すのも一生だからのう」と伯父は全く上機嫌であつた。色々の事業をやつて、何時いつでもその隱棲いんせい的てきな趣味のためには結局は失敗して来た伯父は、六十になつて漸ようやく満足の出来る境きようがい界がいを得たようであつた。それにこの高原の空氣と自給自足の労働とが、よほど健康にも好よかつたらしく、たださえ頑丈な身体が益ますます々丈夫そうになつていた。これから発達しようという由布院の温泉地の一廓いっかくからは全くかけ離れているので、少しも氣づまりな点がなかつた。伯父は夏になると、どんな客が来ても、この浅黄あさぎの帷子の袖無しを一枚素肌すみにひっかけたままで対応するのであつた。その袖無しには、ちゃんと背に一つ大きい家の紋がついていた。「Tこうしゃく侯爵が来られた時でも、わしはこれ一枚で御ご

免めんこうむを蒙るんで」といって、伯父は由布守をもつて自ら任じていた。しかし八月でも、自分のような余り強くないものには、肌脱肌脱ぎなど出来そうもない涼しさであつた。

趣味の方では、伯父は一ひと廉かどの見識をもつていた。それで庭などを造るにも、金鱗湖とか、その向うの由布山の密林とか、裏の田とかいうものが注意して背景としてとり入れてあつた。家の後うしろには流れの速い川があつて、日常の生活はこれで足りていた。飲用にもなつた。従弟いとこは自分のために、この川へ硝子ガラスびん罎びんを沈めて鮠はやを取つたり、笹ささを持ち出して蛭しじみを拾つたりしてくれた。そして秋だつたら、由布山の麓ふもとを一ひと周まわりして来れば、初はつ茸たけが籠かご一杯

とれるのにと残念がつてくれた。

永く隔絶されていた土地だけに、天産物は豊かだった。六年前に来た時、例の汚い宿で、金鱗湖の鯉こいは名物であるから見て来いと勧められて、夜更おそくなつて見に行つたことがあつた。その時には、その池に一杯になる位沢山大きい鯉がいて、月明りの下で盛さかんに跳おどつていた。勿論養魚場だろうと思つていたのに、今度来て見ると一匹もない。聞けば、主ぬしのない池だったので、鯉は自然に繁殖していたのだそう、この頃になつて乗合自動車が通うようになつたら、みんな捕られてしまつたのだそうである。余り暢のんき気な話なので可笑おかしくなつてしまつた。

伯父は丹精して作った野菜やら、鯉やら、鶏やらを沢山御馳走ごちそうしてくれた。川端で鯉を料理して、その腸を雛子はらわたひよこにやると、大騒ぎをして喰たべた。鱗うろこまで呑のみ込んでしまった。鶏が動物質のものをあんなに喜んで喰べるのは初めて見たので、ちよつと意外な気がした。それよりも驚いたのは鯉である。伯父が、スープにした鶏の骨に 庖ほうちよう丁ていを二、三度入れて、それを池へもつて行くと、鯉がみんな浮いて来る。そしてその骨を喰くうのである。二寸すん近くもある鶏の脚の骨を、二、三度不器用に大きい口で啣くわえたり吐き出したりしている中うちに、すっぽりと呑み込んでしまうのである。信州で蛹さなぎを喰う鯉を見た時には、何だか厭いやな気がしたのであるが、今度は余り意外なので全く驚いてしまった。ちつとも厭な感じが

起らずに、かえってその太い骨を呑み込んで、悠々としている顔が滑稽こっけいにすら見えた。

深山にはいった気持は、雨の降る日が一番強く感ぜられる。由布山の頂いただきは、大抵の日は雲がかかっているのであるが、それが段々降りて来ると、薄墨色うすずみいろの雲がこの盆地一杯に垂れこめて来る。すぐ前の林も隠されてしまう。時には窓から部屋の中へはいつて来るのが、よく眼に見えることもある。気象学上の定義からいえば雨と称すべきものかも知れないが、その大粒の雲粒は、殆んどほと水平に近い線をなしてかなりの速力で飛んで行くのがよく見える。こんな日に限って、夕方になるとよく霽はれて来る。山の頂がくつきりと浮き出して来て、雲は細長い帯のようになってその麓に

静かに横よこたわっている。

雨上りの夕方、伯父は跣足はだしで庭に降りて、トマトの蔓つるをしばつてやっていた。野菜でも盆栽でも、伯父の作るものは皆よく育つ。浴衣ゆかた一重で肌寒い思いをしながら、私は傍そばに立っている。伯父は手を動かしながら、こんな話をする。昔、盆栽の一番の薬は何かと聴いたら、主人の鼻息はないきだと教えた人があつたそうだ。盆栽でも、こんなものでも、他人ひとに任せて置くようでは碌ろくなものはないのだ。私は昔、蘭らんの鉢を沢山並べて、その葉を一枚一枚撫なでて、埃ほこりをおとしていた伯父の姿をふと思ひ出した。

Kの主人は、時々珍しい客があると、連れてやって来る。ある

いは客の方は口実で、本当は自分が来たいのかも知れない。つるりと禿はげ上った大きい額と、鼻の先にのせた金縁きんぶちの眼鏡とが、三年前に見た時とちつとも変つていない。

この主人は、掌ての大きいのが一番の自慢なのだそうである。何か書いてくれといわれると、その掌に一杯墨を塗つてべつたりと押し、その横に日ひのしたかいさん下開山二十山を凌しのぐこと五分と書くのが得意である。伯父の家の画帳も勿論その厄やくこうむを蒙つていた。

この前も、九州大学の先生を連れて来たことがあつたそうである。大学の先生ときくと、いつでも伯父は、「忤せがれが——私のことを忤せがれというのである——東京で、T博士の助手をして研究をしておりますわい」と自慢をするのだそうである。後あとで先生の所へ来

た葉書で、九大のK博士ということが知れたのであるが、随分びつくりされたことだろうと思つてちよつと可笑おかしかつた。

私が行つてゐる間にも、KKさんが来た。雨上りの田の畔あぜをいい気持になつて散歩をして帰つて来たら、「今帰らつしたところじゃがKKという人が来たが、東京の人だそうだがお前知つてるか」という。「それは大分有名な小説家ですよ。会つたことはないが、名前はよく聞いています」というと、伯父は道理で大分物の分つた人だと思つたと褒めながら、画帳を開いて見ている。見ると、何やら歌が書いてある。

何でも、伯父の作つた胡瓜きゅうりの漬けたのを、美味うまい美味いといつて随分沢山食つて行つたことと、それからこれも伯父の趣味で

あろうが、ここの浴室は、全然離れた庭の端の金鱗湖のすぐ畔ほとりの所に、亭ちんのように一棟立っているのであるが、その浴室のことを大変簡素でいいと褒めて行ったのだそうである。それで伯父が大分物の分った人だと感心した次第なのである。実際のところ、この浴室は仲々いい。屋根は茅葺で天井も張ってないものであるし、浴槽というのはただの木張りに過ぎないのであるが、温泉に浸りながら山を見るように注意してあつたり、浴槽の底に細こまかい砂利を敷いてそれを度々よく洗って、いつでもフレッシュな砂利の感じを足裏に与えるように気を配つたりしてあるところが、如何いかにも伯父らしい。それに温泉が非常に透明で、また豊富なために始終出流しになっているので、いつ行って見ても、底の細い黒い砂利

がゆらいで見えているのである。

ただ一人でこの温泉に浸りながら、伯父が昔、座敷の床とこの天井の見えない所に上等の板を使つて得意になつていたのを思い出した。伯父の趣味も、あの頃から見ると随分進んでいると思つて見ることも愉快であつた。

高い所なので、冬は殆ど雪ほとんに埋れて暮すのだそうである。冬の仕事に沢山ちむしゃ白檀びやくだんの木を買つてあつた。この附近に、平家へいけの落お武者ちむしゃの墓があつたといわれている。一ひとむら叢むらの林があつたので、伯父が見に行つて見たら、それが全部白檀の林だったのである。今ではこのような九州の山奥でも、白檀のそのような大きい

樹^きは殆んどなくなっているの、伯父は大変喜んで、それをみんな買ったのだそうである。

移せるような木はこの庭へもつて来たが、大きいのは仕方がないので伐^きつてしまつて、それで冬の日は殆んど毎日、盆だの像だのを刻んでいるのであつた。初めはほんの手^{てなぐさ}弄みだつたのが、だんだん色々なものを彫^ほつている中^{うち}に巧^{うま}くなつて来て、自分でも面白味が出て来て、しまいには仏像なんかまで試^{こころみ}るようになったのだそうである。道具といつても極めて粗末なもので、切出^{きりだ}の小刀とか、鋼^{はがね}の帯^{おび}金^{がね}を研^といで作つた鑿^{のみ}位のものであるが、生れ付^{つき}凝^ぎり性の上に、半年の間退屈まぎれに毎日朝から晩までこつこつ刻んでいたので、一^{ひと}廉^{かど}の彫刻家になつてしまつたのである。

昨年祖母が亡くなつて、その供養のためと云つて作った観音像などは一尺八寸しゃくすんばかりもあつて、余り面白い出来なのでちよつと驚いた位である。

盆なども色々の大きさのものが沢山作つてあつた。白檀の太い幹のところは木目が入り組んでいるために、鑿の方向を始終変えねばならぬのだそうで、そのためにかえつて、交錯した鑿の痕あとが自然で面白く出ていた。白檀の木というものが、大変いい香のするものであることも初めて知つた。帰る時には、一番上出来の茶盆を一枚くれた。

一週間ばかりいる中うちにすっかり気持が變つて来て、大變伸び伸

びした。研究なんかどうでもいいと思うほどにはならなかったが、余り忙しく働くのも考え物だと思ふ位にはなつた。

いよいよ帰るといふ日になつて、伯母おばは大変名残りを惜おしんだが、伯父の方は案外平氣だつた。「何処どこにいるのも同じこつた。来年の休みにはまた来い」と、伯父は極めて淡泊であつた。

(大正十五年五月二十日)

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎随筆集」岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年9月16日第1刷発行

2011（平成23）年1月6日第26刷発行

底本の親本：「冬の華」岩波書店

1949（昭和24）年

初出：「社会及国家」

1926（大正15）年5月20日

※表題は底本では、「由布院行《ゆふいんこう》」となつていま
す。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

由布院行

中谷宇吉郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>